

會



報

昭和18年12月

128

日本山岳會

山に於ける強さのことなど

關根 吉郎

も及ばぬことであらう。

英國は過去約二十年の間にエヴェレストに偵察も加へると七回の遠征隊を送つたことになるが、どの計畫を眺めて見ても、登れさうだつたと思はれるのは一度も無さうである。ラットレッヂを始めとし、英國の偉い登山家達は、失敗を主に天候に歸せしめてゐる様子であるし、我が山岳界でも、それをそのまゝ鵜呑みにしてゐる向が多い様に見えるけれど、私にはこの態度はどうしても領けない。天候に依る部分の大きいことはよくわかる。然し彼等の隊には他にもつと重大な弱點や缺點が果して無いものだらうか。これを反省することなしに、凡ての責任を自然の現象に負はせるのは、如何にラットレッヂと雖も虫が良すぎるやうに思ふ。

私はこれから英國登山隊の弱點に就いて少しばかり觸れてみるけれど、これは決して彼等を嘲笑するためではない。批判の鏡には先づ自らの姿をこそ寫してみるべきものであり、我が登山界もこの邊りですっかりした態度を鍛え上げない以上は、日本的登山などは、如何程叫んでも、その實現は夢に

細かい點を算へあげれば澤山あるけれど、特に目立つ弱點が二つある。一つは隊員が山の上で弱いこと、もう一つは極地法登山の考へ方に缺陷があることである。世界に名だゝるつは者を集めた隊員に向つて非力だなど言ふと私の頭を疑ふかも知れない。そして實際のところ、現在の我が登山界の第一線に立つ人々よりは、或は強いかも知れないのであるが、何と云つてもエヴェレストを登らうと云ふにはあまりに弱過ぎるのである。グリーンンの如きは、何處に現はれても、六呎四吋と必ず書かれる程の大男であるし、又拳闘の選手をしてゐたとか、ケンブリッヂとのボートの對抗戦を漕いだとか云ふ人々も隊員の中には多いのだから、都會で腕力を比べたら皆相當なものだと思ふ。こんなことに驚ろく位なら、兩國の關取連に登つて呉れと頼みに行けばよいであらう。立派な根據があるわけではないが、私登山に最調の體格を日本人なら五尺四五寸、十六貫内外だと考へてゐる。勿論十二

三貫と云ふ様な小さな人達が激しい登山に耐えられる率は小さいであらうが、二十貫を越す大男も、重力の影響を人一倍感ずる様である。

ジョンモリス先生が二度目に來朝された始めの頃、ある所で先生の講演會を催した。話が終つてから、どの位の體格がエヴェレスト登山に適してゐると思はれるかと質ねた人があつた。その時、先生は聴衆者の一人であつた私の傍へつか／＼と歩み寄つて來て、私の體を撫でまはす様な形をしながらあなたの様な體格が理想的だと思ふ、私のやうな體は大き過ぎると云ふ様なことを言はれた。お世辭の上手な西洋人の言葉をそのまゝ受取るのはお目出度過ぎるとしても、その席上には先生位の大男から、私等よりもつと小柄な人迄大小様々の人間があつた筈であり、その中から特に私を呼び出したに就いては、其處に根據があつたのだと考へる方が素直な物の考へ方かも知れぬ。先生は昨午交換船で歸國されたが、その折、一九三三年度エヴェレスト遠征の寫眞を残して行かれた。私もこれを二三回見る機會があつたが、これを見て長らく忘れてゐた先生の言葉を思ひ出したわけなのである。その寫眞は時の登攀隊員ウインハリスの

目次

○山に於ける強さのことなど

……關根 吉郎……一

○秋の久住山

……茨木猪之吉……三

○ヒマラヤ登山小史(一)

……田邊 主計……四

○會員通信

周布光兼・望月達夫……七

○切抜報

山岳、地誌、民俗等に関する

新刊書目拔萃

○集會記事

小集會

山岳關係出陣學徒壯行會

關西支部山岳兵研究會

○會務報告其他

四貫程の荷を持つた者と同じ足どりで進めると云ふことは、兩者の間に餘程の力の差がある場合でない限り考へられない様に思ふのだが、エヴェレストのポーター達は恐らく四貫に近い荷を持つて八〇〇米以上の第六キャンプ迄、空身の隊員達に従つて足並に亂れを見せつゝなのである。ポーター連の強いと云ふのが、私の單なる僻見では無いと云ふ例證を、ドイツ人の場合であるがもう一つ並べてみて、次に強さの問題に就いて少しばかり考を展開させてみようと思ふ。

今度は、メルクルを隊長とした例のナンガバルバットの遠征である。實にひどい計畫であるから、あの悲劇も當然の結果かも知れないが、あの大きな悲劇の中に、見逃し得ない一つの小さな悲劇のあったことを、あの報告書を読まれた方は氣付かれたことと思ふ。吹雪が来て、上下の連絡が断たれて終ふ。下のキャンプでやきもきしてゐる時に上の氷壁を下つて来る四つの人影を望む場面があり、四人の三三人は自分達の仲間で、一人がポーターかと思つたと書いてゐるのであるが、下つて来た四人は最後迄主人に従順に服したポーター達であつたのである。寫眞を見てわかる通り、これ等頑強な

ポーター達はヨーロッパ人よりは遙かに小柄な體であり、我々と大差ない人達ではないだらうか。この邊りですぐに、だから日本人はエヴェレスト登山には最適なのであつて、日本登山隊は必ずその頂上を登るだらうと云ふ結論が出れば大變都合がよいのであるが、これもさう簡單にはいきさうもないのが少々寂しい。

強さとか耐久力とか云ふ問題は仲々むづかしい問題であつて、現在私が考へてゐるだけでも少々長くなる。その要點だけを言つてみると、耐久力はどうしたら増強出来るかと云ふ問題と、それを山では如何にして出すかと云ふことと、もう一つは強さを測るものさしの問題である。さうして先づ始めに大體の限界を與へなければならぬのはものさしの問題なのである。わかり易いから關取を例にとつて考へてみるが、双葉や照國の強いといふことには誰も異論はあるまい。然し日本國民の體格と體力の完全さを象徵する甲種合格であるとか、體力章の上級であるとか云ふものさしを以つて測れば甚だ不完全な體と言はなければならぬいし又九十歳、百歳の長壽を保てさうな體とも見えない。登山に於ても、他のものさしでは測定出来ない獨特の強さがあつて、エヴェ

レストを登らうと云ふ場合などはその様な獨特な強さが要求されるものと思ふ。

私は今迄、日本の登山界に廣く交渉が無かつたからよくはわからないが、相當一生懸命にやつてゐる社會だと云ふことは想像出来る、山の上での強さなど云ふ問題になると、全く無頓著であると思ふ。強さなど言ひ出すと、わび、さびを辨へぬ生吳者と見られ勝ちであつた。強さの問題は當然年齢の問題と聯關して来る。勿論登山は殆んど年齢とは無關係に行はれるのであるが、最も烈しい登山に耐へ得る年齢には自から限界がある筈なのである。それにも拘らず、我が登山界には學生中は登山の準備時代であり、眞の登山は學校を卒業して後に始めて行はれるものだと思ふ意味の言葉が相當に流行した。これも全然素人の言葉か、或は單なる比喩と見做すべきかも知れないけれども比喩とすれば確かに罪深い表現であつた。登山最適の年齢に關してモリス先生は二十五—三十二歳と云はれ、私は日本流の數へ年で二十一、二から二十五、六迄と考へてゐる。西洋人に比し日本人の方が年若くして最高の力を示してゐることは多くの運動競技に一瞥を與へればすぐわかることである。

この問題には兩者の間の社會情勢の距りが大きな意味をもつものと一般には解釋されてゐる様であり私もさう思ふ。十年以上も前の話であるが、野球と角力の記事を編輯する雑誌に、我が力士と彼の職業野球の選手を採り上げて、その活躍の期間と年齢の問題が論じてあつた。この二つは人間の力と技とを十分に發揮するのに最も惠れた社會と見做せるから、他の方面の參考にはなると思ふ。臆氣な記憶であるが、共に三十一—三十五歳の間に最高の能力を發揮してゐると云ふ結論だつた様に思ふ。あちらの野球は知らぬが、現在の角力はその様式に幾分の變化が認められ、それと同時に年齢の方にも幾分の低下がありはしないかと思へるが、あの様な社會で育てれば三十歳を越しても猶勝れた技と力は期待出来るものと考へられる。

然し同じスポーツとは云つても、かのロスアンゼルスのアリソンビツク大會に於て世界の水泳界を瞭若たらしめた日本水泳界の主力はあちら流に數へれば僅か十六、七歳の少年達であつた。同様に登山界には登山界だけの最適年齢といふものはあり、日本人の最適年齢は外國人のそれとは又異つたものだと思ふ。それであるから理想的な體格であるとか年齢

とか云ふものは「ものさし」の決り次第考へられ、この範圍の人々を適當な手段方法によつて鍛えれば強さの點では申分のない隊は構成出来る筈であらう。さうしてこのやうな強い隊にして始めて本當の山登りは出来るのであり、將來のヒマラヤ登山を托するに値するのであらう。

我が國の登山界には相當古くからヒマラヤ遠征は話題に上り、本當の登山とは何かと論ぜられてゐたに異ひないが、どうしたわけかそれには絶対に必要な強さの問題は見逃がされてゐた。たゞ山への熱情さへあれば、それで事足りた泰平な時代を過して来た。こゝでは、この原因を追究してゐる餘裕はない。唯登山家が山登り以外のものに、心を奪はれ過ぎてゐるものなつたであらうか。山登りそのものゝ研究、努力をせず手八丁、口八丁で一人前になり上る傾向が果してなかつたであらうか。登山に限界を與へざるを得なかつたのは、これがためではないだらうか。こんな調子では登山を一つの藝だなど、洒落てみたところで、その藝がお嬢さん藝でないならば、寧ろ不思議と云ふべきであらう。登山が藝であつてはなかつたかまはぬけれど、若し藝だと云ふならば限られた舞臺で教はつたものしか演ぜられぬ藝ではなくして、何處の舞臺でも演ずべきものは演ずることが出来る藝に迄、精進すべきが本物であらう。頼みとする學生は引續いて行つたが、残つた者は、眞面目な反省から批判檢討を繰返し、力を落すことなく努力していきたいと願ふ。

秋の久住山

茨木猪之吉

久留米で久大線に乗り換へたのは十月二十四日の晝頃だつた。初めて接する此の地方の山野、特に稲田の收穫時なれば素晴らしい位、黄金色をなして秋空は高い。豊後中村驛に着いた頃に日は傾いてゐた。驛で茫然としてゐたら誰やら下車する人を探がしてゐる人があつた、私は飯田村の會員加藤数功君を訪ねて來た者と申すと、私

が加藤です丁度よかつたです、幸ひ今トラツクも來てゐるし、直ぐ乗りましょと、僕のリュックを肩にして乗り込んだ。秋の日は短い九酔溪あたりに來たら薄闇かつた。だが谷間の紅葉は明かだつた、桂小屋から更に十三曲りを上り村の郵便局で一止まり要用をたし、グン／＼飯田高原に登る、雄大な草原で驚ろいた。遠くの秋山或は深い雲にとざ／＼れた硫黄山の煙りが丁度残雪の様にも見え、ス、キはなびいてゐる。

硫黄山事務所の大きな宿舎に着いた頃は全く暮れてしまつた。其の夜は加藤氏一家に迎へられ温い御馳走にあづかつた。
翌日好天、終日作畫生活に遣入つた。三俣山や星生山、或は黒岩山の一角などの秋色牧場に降り、晴れた飯田高原を眺め彩筆を振つた、時々はこの附近の中郡温泉星生湯、寒ノ地獄に入浴したり人氣渺ない淋しい高原のいでゆは珍らしかつた。數枚の寫生畫を得て更に硫黄山を傍に諏峨守越をして法

華院温泉へ滞在數日を要しあせび小屋の美しい山莊にて終日畫作して秋深く寂とした高原を獨り黙々の日を送つた。
十一月二日は北千里濱から久住山に登り、頂上から晴れ渡つた阿蘇や根子岳を直下に眺め北九州地方の山々を望む事が出來た。降りは御池の小石屋に出て温泉に降つた。

十一月四日は早朝からすぐ向合つた大船山を坊ケツルへ飛ぶ様に落葉した道を登る、ガス頻りなれど尾根に出た頃は晴れて一氣に頂上へ風強けれどよく晴れた、コノ山頂の眺望は加藤君に聞いてゐた成程なものと感心する。折から大學生三名と他の四九名の登山客も登つて來た。頂上は暫らくは賑やかだつた。

里心を感じ再び新緑の頃でも訪ふ約束して辭した。

法華院温泉

雲天



十一月二日

一昨日登つた久住山は手に取る様に山容は頗る明確に明かな色彩を發してゐる。足下に温泉宿や小屋などが目に入る、人々は思ひ思ひの下山の道をとる、私は獨り池の周圍に出て久しく寫生畫に時を過ぐしてゆるりと温泉へ下山した。

有名な地の竹田へ着いたら見物する時間なく、直ぐ熊本行の列車に乗り込んでほつとした。阿蘇外輪山の雄大なのに驚ろき、車窓風景中々興趣あり、夕方近き頃熊本市に着き昔友の藤島君を訪ね、のび／＼と静養、天候も秋雨となり落ちつく事頻りなり、庭前の白川の流れ靜かなり。

法華院温泉は氣分中々よろしく第一餘り難踏せず最も期節の點もあるかも知れぬが誠に居心地よく見なれぬ風景と人情習慣興味多く食物特によく相當に温泉は効能あるらしい。どうもきりがないので

× × ×

ヒマラヤ登山小史 (一)

田邊主計

インディアン・イアブック (ボンペイ「タイムズ・オブ・インディア」刊一九三九—四〇年版) 中に「Climbing in the Himalayas」の一章があつたので、どんなことが書いてあるか読んでみるうちに、ツイ譯してしまつた。それを「會報」の紙面に餘裕のある時に掲載して下さればと思つてゐた。この印度 鑑は政治、經濟事項を主としてゐるのであり、この登山史は一般的のもので、もとより山岳會々員に對しては粗末なものである。又、既に人々の耳に新しいことは一つもないので御迷惑かと思つたが、私自身かつて讀んだ之等の記事の記憶を新しくするには多少役立つた、何となればこれらの事柄は折にふれ讀んでゐなければ、直ぐ忘れてしまふ傾向があるからである。

こゝには原文通り掲げた。括弧 () 内は私が書添へたものである。然し、これだけでは不十分であるから次號にでもまとめて註釋を加へたいと思ふ。

尙「會報」に從來掲載されたヒマラヤに關する總括的の記事には左のものがある。

- 一、ヒマラヤ主峰登攀年譜 (黒田孝雄氏) 第五六號
 一、完登の七千米突級 (吉澤一郎氏) 第八一號
 一、ヒマラヤ及カラコラム主峯山岳圖 (吉澤一郎氏) 第八三號
 一、カラコラム遠征 (探検、踏査登山) 年譜 (吉澤一郎氏) 第九三號
 又、今回刊行の當會編「山日記」二六〇三年版中の「亞細亞の高山表」(七千米突級以上) は吉澤一郎氏の勞作であり甚だ有益なる資料である。

又、今刊行の當會編「山日記」二六〇三年版中の「亞細亞の高山表」(七千米突級以上) は吉澤一郎氏の勞作であり甚だ有益なる資料である。

X X X

▲ヒマラヤへの遠征の要する規模の大、費用と日數の關係からこの世界の最高山脈への登山及探検の未だ大多數が残されてゐる。二萬五千呎以上の山岳五〇を越す内 (日本山岳會編山日記二六〇三年版記載吉澤一郎氏作成の「亞細亞の高山」(七千米突級以上) 中にも二萬五千呎以上のもの五十六を掲げてゐる) 登頂されたものの僅かにカ

メット、二五、四四七呎 ナンダ・デヴィ、二五、六六〇呎 (ナンダ・デヴィ西峰二五、六四五呎) 前記吉澤氏高度表に據る) の二つのみ。

右よりも更に高度低きもの數限りなくあるも、それらの多くのものは近代の登山技術を以てしても登頂困難なるものである。最高峯はエヴェレスト、最近の測量によれば二九、一四一呎 (又は二九、〇〇二呎、八八四〇米) 英國登山隊は從來この高度を記載) 第二位はカンチエンジュンガ及 K₂ 共に二八、一五〇呎にして果して何れがより高きか未だ明瞭でない (K₂ 二八、二五〇呎又は二八、二五三呎、カンチエンジュンガ (III) 二八、一四六呎) 吉澤氏高度表に據る)

▲先蹤者たち

ヒマラヤへの登山は約八十年前に始まつた。それらは地形調査のために入りこんだ人々である。それらのうちシユラギントワイト兄弟は一八五五年にイースターン・イビ・ガミン・カメットに従隨する一座の二二、三二九呎に達してゐる。アイ・エス・ボックツ―印度測量局―は同地方の二二、〇四〇呎に測量板を据えたことがある。他の特筆すべき初期探検者は著名なる植物學者サア・ジョセフ・フリーカである。彼は一八四九年カンチエンジュンガのシキムヴァレイ (複數) を探検、カンチエンジャウ (二二、七〇〇呎)、パウフンリ (二三、一八〇呎) に登山を企てた。印度測量局のバンディット (複數) に

よつても幾つかの顯著なる探検は行はれ、バグ・サラット・チャンドラ・ダスはジョンソン・ラ (二〇、二〇〇呎) を越へてゐる。

一九世紀後期—ロード・コンウエイは一八九二年カラコラム・ヒマラヤス、特にバルトロ・グラシアーヒマラヤ最大氷河—に探検、二三、〇〇〇呎の一ピークに登頂サア・フランシス・ヤング・ハズバン

ドは同じくカラコラムスに入り最初のカラコラム峠越へに成功した。デユク・オフ・ジ・アブルチイもこの方面に幾回かの探検を行ひブライド・ピークの二五、〇〇〇呎に達してゐる。かくして「登山」は急速に發達、エイ・エフ・マムメリイ、エヌ・コリイ、シイ・ジイ・ブルウスの果斷なる登攀がナンガ・バルバットに向つて行はれた。この最後の登攀に於てマムメリイと二人のゲルカは生命を失つた。一八九九年デイ・ダブリユ・フレシユ

フィルドは初めてカンチエンジュンガ周圍を一巡、そのネパールの探検をも行つた。

▲新局面—ゲルカ次にシエルバ及びボチャヤに對する登山訓練により一流ボーターたる資格の養成なるに及んでヒマラヤ登山は新局面に入つた。この功績はシイ・ジイ・ブルウスに歸するものである。

ブアロツク・ウオクマン夫妻は

幾度かカラコラム探検に、ダブリユ・ダブリユ・グレイアムも幾回かの目醒しい登山を行つた。彼はスイス・ガイドを同伴、カブルウ (二四、〇〇〇呎) もこの内に含まれてゐるが、これには論議が伴つた。カブルウには後に諸威人リユベンシユタイン・モンラド・アスガ登り山頂間近まで達してゐる。今世紀は後に一九二一年エヴエレスト登山途中病氣したエイ・エム・ケラスの目醒しい数々の登山によつて幕を開けた。カンチエンジュンガ、パウフンリ、チヨミオモ等を含む瓦峯への登攀の試み、中部ヒマラヤへの幾回かの探検がそれらの中に含まれてゐる。一九

山日記發行

昭和十八年山日記は約一年後れて十一月中旬やつと發賣となりましたが書店に出たものは殆んど即日賣切れの狀態で、市中では全く見かける事も出来ませんでした。

同日記の曆は十九年には役に立ちませんのでそれだけを別に作つて希望者にお頒ちしたいと存じますから五錢切手同封改めて申込み下さい。

本會取扱の分も既に豫約だけで一杯になり賣切れの形で、解約が少し出来ましましたので幾分餘裕が出るかと思はれますが御入用の方は一應問合せ見て下さい。

二〇年 H. T. Morshead (モーズヘッド) 先年私はモオシエッドと讀んだのをこの機会に訂正致度し、はカメットの二三、五〇〇呎に到達。

一九〇七年ブルウス、ティ・ジ・イ・ロングスタツフ及エイ・エル・マムはガルワル・ヒマラヤを探検、カメットを踏査、其後にロングスタツフは瑞西ガイド、カレキレス及アンリ・プロシエルを同伴、トリスル二三、四〇六呎に登頂(トリスル西峰二三、三六〇呎—吉澤氏高度表に據る)これは一九三〇年ジョンソン・ビイク二四、三四四呎(二四、四七二呎—同右)が登頂されるまでは登頂の最高なるものであつた。

一九一一年及一九一二年シイ・エフ・ミイドと瑞西ガイド(複數)によつてカメット登頂は企てられ二二三、五〇〇呎に到達、當時モリス・スリングビーも又カメットを試みた。

▲カンチエンジュンガー—この巨峯への最初の企圖は一九〇五年に行はれ失敗に終つた。即ち、Lieut Pache と三人のボオタアは雪崩に殺された。第二回は一九二九年のイ・エフ・フアマなる一米人の單獨行であるが等しく生命を失つた。同じ時ボオル・パウワアに據るバアリアン登山隊の果斷な登

山が行はれた。北東山稜二五、〇〇〇呎に達したが悪天候により退却の止むなきに至つた。

一九三〇年デイレンフエルトに率いらるゝ國際登山隊はネバル側からの登頂を企みたが、氷崩によりボオタア一名を失ひ退却、但、ランタン・ビイク二三、二〇〇呎ジョンソンビイク二四、三四四呎を含む數々のビイクに登つた。

一九三一年パウワアの再舉、一九二九年の時よりも稍高所に達したが H・シヤアラア及ボオタア一名が墜死した。同じく一九三一年夏エフ・エス・スマイスに率いらるゝ英國の青年登山隊はカメットの頂上二五四四七呎に達した、蓋し二萬五千呎以上の山嶺に達した最初のものである。

▲エヴェレスト—この世界最高峯に對しては既に六回(一九三八年登山を加へ七回)登山隊が向つてゐる。一九二一年及一九三五年は踏査、一九二二年、一九二四年、一九三三年、一九三六年が頂上を目指したものである。

一九二一年踏査はシイ・ケイ・ホワアド、バリーに率ひられ、充分な準備を以て行はれた。北面よりの踏査は調査され、總て必要な地方官憲との連絡を結んだ。この準備を以て次年一九二二年にシイ・ジイ・ブルウスを隊長とする登

山隊が山嶺を目指して出發し、二七、三〇〇呎に達したが七名のボオタアを雪崩によつて失つた。

一九二四年再びブルウスにより登山隊編成、但健康を害したる爲隊長はイイ・エフ・ノオトンに交代ノオトン及ティ・エチ・ソマヴェルは二八、二〇〇呎に到達、最後の攻撃はエヌ・イイ・オデル及ハザアドによる補佐隊に援助されてジイ・エル・マロロイ及エイ・シイ・アヴィン(の二名によつて行はれた。

六月六日二五、〇〇〇呎キャンブをボオタア三名を伴れて出發、ボオタアは二六、八〇〇呎迄荷をあげて歸つた。マロロイ及アヴィンは六月八日山嶺へ向つたまゝ歸還せざ。六月十日オデルは二七、〇〇〇呎に(三度目)達した、なほ兩名の消息不明、ノオトンに右遭難を信じた。これを以て一九二四年登山隊は引上ぐるに至つた。

一九三三年登山についてジェイ・エル・アール・ウィア(シツキム在住)の盡力により西藏政府の許可を得、隊長ヒュウ・ラトレツデ隊員スマイス(一九三一年カメツト登攀隊長)シン・ジョン・パアニイ、イイ・イイ・シブトン、シイ・アル・ゲリリン(カメツトにスマイスと同行)等。隊員は二月カルカッタ着、準備を整へ、四月十七日ロンブク・ヴァレイにベイス・キャン

ンブ、四月二十一日第一キャンブ建設、爾後モンスウン前の異常なる悪天候に阻まれノースコル二三、〇〇〇呎に達する迄に暇がかゝり第四キャンブ二二、八〇〇呎建設は五月中旬になつた。登山隊は無線電信機を携帯、天候豫報はアリガオルの氣象測量所から受けダアジリン、ベイスキャンブ、第三キャンブ(二一、〇〇〇呎)に各据置、第三キャンブとノースコル間是有線電話により連絡、故に印度平野と二三、〇〇〇呎キャンブとは短時間に連絡が可能であつた。

吹雪 烈風の連続のため第五キャンブは漸く五月二十二日二二、五〇〇呎に建設、一度第四キャンブに退いた後五月二十八、九日に第五再建設。ウイン・ハリス、エル・ウエイジア、ジェイ・エル・ロングランドは最高第六キャンブ二七、四〇〇呎(一九二四年のものよりも六〇〇呎高所)を建設。右はボオタアの非常な努力によるものであつた。次の朝ハリスとウエイジアとは登頂路調査に出發、北東稜のクレストに沿ふ登路発見には失敗、結局一九二四年ノオトン登路を採用。二八、一〇〇呎に於て悪天候に阻止第六キャンブへ退却。

更に第五へ引上げ。六日月スマイス、シブトン兩名は第六を出發頂上へ向つた。出發後一時間半に

してシブトン身體狀態不良となスマイス單獨進んだがウイン・ハリス、ウエイジア到達點と略同高度に於て急斜シユラブ上の粉狀深雪に悩まされて退却の止むなきに至る。(中略)隊員の凍傷、心臓故障、高度による被害等のため一行はベイスキャンブに引上、一週間後再舉を企て、第三キャンブまで登つたがモンスウン開始に當り遂に登頂を斷念ダアジリンへ引上げた。

一九三四年特異なるエヴェレスト登山がモオリス・ウイルスンなる若年飛行家によつて企てられた。彼は正式なる手續を経ず西藏に潜入、數人のボオタアを伴つてエヴェレスト二一、〇〇〇呎に達しボオタアを返した上單獨頂上へ向つたまゝ消息を絶つた。一九三五年シブトン一行によつて第三キャンブ二一、〇〇〇呎近くにその遺體は発見された。

一九三五年初西藏政府は一九三五年六月より向一ヶ年間の登山を許可した。有力なる登山隊組織の日數がなかつた爲シブトンを隊長として小規模登山隊を組織した。目的はモンスウン期と積雪、天候等のデータ調集、西側よりの登路踏査、頂上攻撃への新人訓練、心理學的研究、寫眞測量、ノオスコルの結氷狀態研究等であつた。右

の研究によりエグエレストはモン
スウン期中登山は不可能、モン
スウン開始直前期間のみ可能性あ
りと認めた。この行に於てもノオ
スコルの大雪崩から危く脱れた。
この調査中二萬呎以上のピークに
登る事二十四に達した。

一九三六年登山は隊長ラトレ
一九三三年登攀者三名シブトン、
スマイス、ウイン、ハリス及同年シ
グナルファイサアのスマイス・ウイ
ンダム参加、この行も非常な悪天
候のため屢々異常なる状態に出會
平年と異りモンスウン前の北西風
なかりし爲積雪を吹拂ふことが出
来ず吹雪、積雪に悩まされた。異
常に早くモンスウンは五月二十四
日に始まつた。これに屈せず二回
ノオスコル登路を開かうとしたが
非常に困難であつた。シブトン及
びハリスはこの企に於て雪崩に危
く生命を失はんとさへした。次に
ロンブツク主氷河を上りノオスコ
ル西側調査を行つた。嘗てマロリ
イが不利と認めたこの西側は可能
性あるのみならず、モンスウン期
中には東側よりも危険な事事を
證明した。(この行は期くしてある
間に登頂の機会を失し勵念して引
上げた)

一九三八年登山隊長アルマ
ン、隊員シブトン、スマイス、エ
ス・イ・イ・オデル、シイ・ビー・ユ
ム・ワアレン、ビー・ロイド、ビー
アル・オリヴァの七名からなり従
來のものに比し著しく小規模であ
つたが、大規模のものは運命、計
畫等に束縛される不著しく小規
模の方が成功の可能性多い事を認
めたからであつた。從來のものは
経費一萬磅又はそれ以上を要した
が、一九三八年のものは頂上到達
には又々失敗したが僅か二五〇〇
磅を以て費用を賄ひ得たのは成功
であつた。

四月六日ロンブツク着、四月二
十六日第三キャンプ建設、烈風と
酷寒によりカルタ・ヴァレイへ引
上げ休養。モンスウンは再び例年
より早く五月五日に開始、五月二
十四日第四キャンプ建設後退却、
ロンブツク主氷河によりノオスコ
ルを西側より登攀、第四キャンプ
を六月五日再建設、六月八日第六
キャンプをシブトン、スマイス及
七人のボオタにより建設、翌朝
山嶺を目指したが深雪に悩まされ
二七、三〇呎より引かへした。
更にテハマン及ロイドは六月十一
日再攀を計つたが右以上の成功を
齎さず、登山は勵念されるに至つ
た。

▲飛行機による探検 一九三三年
エグエレスト山中撮影を目的とす
る企があつた。レイ・ヒュウ
ストンの財政援助によりエル・ブ
イ・エス・ブラツカアがリイダア、
主任パイロットロッド・クライデ
スデル、二臺の特別装置を施し
た飛行機(Wap)を使い、二臺
共エグエレスト山嶺飛行に成功、
優秀な撮影をなし得た。ネバル政
府の許可により其地バハニアから
同國横斷エグエレストへ飛び得た。
同年(一九三三年)他の山岳飛行
の詳細發表があつた。即ち、一九
三二年十月、ザールの英國飛行
隊(ア・エ・エフ)によつて行は
れた同地よりギルギットへの往復
飛行である。普通の軍用機五臺參
加、インダスヴァレイを通つてナ
ンガバルバツを経てギルギット
まで二八六哩二時間二〇分歸路二
時間五分を要した。ギルギットか
ら、フンザ、ナガル・ラクジョト
地域へ飛行、ナンガバルバツ・
ラカボシ兩峯及重要地點の機上撮
影を行つた。

▲ナンガ・バルバツ―一九三二
年ミニヒのメルクル指揮による
登山隊がこの峯に向つた。ギルギ
ット駐在のレフテナントアル・エ
ヌ・フライアがトランスポート・オ
フ・サ、米人ランド・ヘロン及ミ
ス・イ・イ・ノルトンが参加、八月に
山嶺到達を數回試みたが、天候に
より失敗。

一九三四年の悲劇―メルクルは
獨乙及オストリアの著名山岳家を
含む前回よりも強力なる登山隊を
編成、印度駐屯軍のフライア及ッ
ングスタア兩キャプテンがトラン
スポートファイサアとして参加。
先づドレキセル病死の不幸に遭ふ。
種々なる故障のため第四キャンプ
は六月末迄建設不能、山嶺を急い
だ、めスケルトン・キャンプ(複
數)を後に前進、二五、〇〇〇呎
に到達後二四、八〇〇呎に第八キ
ャンプを建設したる猛烈なる吹雪
來襲、退却を開始したるも吹雪と
歸路キャンプ不完全なる爲途上九
名の人命を失ふに至つた。即ち、
メルクル、ウエルゼンバツハ、ウ
イーランド及ダアジリン、ボオタ
ア六名(一九三三年エグエレスト
に参加せる者)である。歐人にし
て脱れたるものオーストリア人二
名シユナイダア及アツシエンブル
マア。生存のボオタ全部は凍傷
を受け、内一名又は二名は週日を
介糧天幕なくして雪中に戦ひ抜い
たものである。

一九三七年五月ウインを隊長と
する他の獨逸登山隊が右に屈せず
ナンガバルバツに向つた。六月
二十日シムラに同登山隊の遭難が
報ぜられた。僅かに一名ドクタ
ルフトを残し全員遭難の事實が明
かにされた、即ち登山隊九名の内
八名、ボオタ九名も殉職したの
であつた。専門家の意見によれば

この季節の登山は可能性甚だ少な
く、秋季の方が可能性があるとい
ふのである。
一九三四年カラコラムへジ
イ・デイレントフェルトの率ゆる探
検あり。キン・メアリの四つの
ピーク全部に登頂、從來三角測量
により高度二四、三五〇呎とされ
てゐたが右探検隊はこれよりも
一、〇〇〇呎高いと云つてゐる。
一九三四年シブトン及ティルマ
ンはナンダ、デヴィ山麓リシイ、
ガンガ地域探検に成功。同地域は
多年近付き難いとされてゐたもの
である。右は先人ロングスタツフ、
ラトレツ等の業績を更に進めた
ものと云はる。兩者は更にバドリ
イナスガンゴトリ迄サボタシス峠
經由にて横斷、ガンゴトリ・グラシ
アの頭部を探検、之によるナンダ
デヴィへの登路發見に據りティル
マンを隊長とする英米登山隊は南
西山麓より登頂に成功。登頂者テ
イルマン及オデル。この登山に於
てはボオタの病氣により隊員自
身が天幕等を擔上げた。
一九三二年八月十二日カシユミ
ルのバビガム附近ハンジタリン登
山中に C. E. Seely (發音シテ
ユア) 及デイ・エム・バアンは命を
失つた。(以下次號)

會員通信

滿洲より

周布 光兼

拜啓 會報第一二五號並に山岳入手致しました。有難う御さいます。非常に懐しい氣持で讀みました。會員諸兄の御健闘ぶりに何かホツとした氣持です。山岳誌上の雪崩の繪と物語には心が休まる様な氣持ちでした。カンチエンジユンガの寫眞もわく／＼させます。何はともあれ厚く御禮申し上げます。皆様の御健康を祈ります。先づは右取敢ず御禮迄 草々

北方より

望月 達夫

丁度西報一二六號が來まして昨夜全部讀んだ所です。此頃は會報の御仕事も御骨折のこと、何時も先づ感謝の氣持でひもとく事にしています。少しおくれたりもあつた變らぬ姿で出てゐることは何より幸せなことと思ひます。今號では會員通信が一番うれしく、語られてゐない苦しみや楽しみ迄もつたへてくれました(何も自分のが出てゐるといふことではなし

(に)

次に吉澤氏の文章の中の守の西穂高山莊にはとても心をひかれました。何れ同氏へも一筆呈上したいと思ひます。神河内を中心とした地域には特に關心をよせてゐますし奥原守や孫人のこと、その家族のこと等心に浮んで來ます……其他西岡さんの對山館、沼井さんの御研究等皆興味がつきません。貴方も言はれてゐる通り、もう少し「うるほひ」があつたらと小生も感じてゐます。例へば吉澤氏の頁に茨木さんのスケッチ(多分西穂高山莊のがあつたでせうが)入つたらば更に良く、又組方に今一工夫あつていゝと思ひました。併し誤植の少い事は嬉しく有難いことです。

こちらはもう本統の冬の姿で、物思ひにふけた曇り日が二、三日訪れてはまた思ひ出した様に風を伴つた雪が亂舞して新しい白さを加へてゆきます。たまに晴れた日に強い風を受けつゝ高みに登つて遠い方の高い雪山を眺めることは一番のたのしみです。コンニデ型の美しい火山と鋸齒狀の根強い山波が見られます。樺松もハンノ木叢も大方は埋れて白々とした世界の展開、波と風の音、こゝも矢張り自然の美しさとかおそろしさとかい人の心、異常な影響を與へます。又御便り差上げます。

(田邊宛通信より編輯係)



帳 抜 切

山岳、地誌、民俗等に関する新刊書目拔萃

(新刊弘報に據る)

弘報第十二號—第十五號掲載分
(刊行豫定日十一月十一日—十二月二十日)

●冬期白頭山の研究

京城帝大大陸文化研究会編
東都書籍會社

●日本名山紀行

川崎隆章編 體育評論社

●名山三十座につき分擔執筆

●或る登攀家の生涯

長井一男著 昭和書房

●ナンガパルバット登攀のウイ

●リイ・メルクルの生涯

●ブリヤート蒙古民族史

蒙古研究所譯 紀元社

●ソ聯刊行書の翻譯

●ゴビの沙漠

ゴビ沙漠學術探検隊編

●目黒書店

—東京帝大理學部多田氏を隊長とする右探検隊の昭和十六年七

八月二ヶ月内蒙ゴビ沙漠探検報告

●北方の植物

館脇 操著 アルス文化叢書

●二十年間に亘り撮影せる北方

植物の生態、北海道の自然と人

文との接觸、北日本森林群落、

高山植物大要、登山指導を含む

●山國の風土記

酒井源一著 三省堂

—子供達の郷土に對する愛情を

深めようとして書かれたもの、主

として木曾地方農家の四季行事、

郷土風物、挿畫入長篇童話

●雪國の太郎

伊藤整著 帝國教育會出版部

—雪國の一少年(國民學校五年

生)の日常生活

●雪に生きる

猪谷六合雄著 羽田書店

—日本スキー初期以來獨創と忍

苦とを以てその研究に終始一家

を擧げてその道に専念せる研究

●と記録

●山岳戰

坂部護郎著 墨水書房

—一般に判り易く説いたもの

●北方國の家

鷹部屋福平 彰國社

—主としてギリヤーク、オロツ

コ、アイヌ及白系露人の住居の

●學術的研究

—アラスカ、シベリア地政治學

松川二郎著 櫻井書房

—中央亞細亞より亞拉比亞へ

太田阿山編 東亞協會

—陸軍大將福島安正のベルシア

よりコーカサス、中央アジア等

先驅旅行に關するもの

—西南アジア—ソ聯より見たる

吉村忠三譯 武藏野書房

—ソ聯商業會議所が外國貿易人

民委員會後援のもとに出版せる

●もの

●民族科學研究

古屋芳雄 朝倉書店

—日本學術振興會第十一特別委

員會報告

—古代亞細亞民族文物の研究

江上波夫著 日光書院

—考古學及歷史學上より東亞諸

民族の文化關係の諸問題を論究

せるもの、就中東西文化交流の

問題をその主要テーマとしてゐ

る。尙邊境諸民族の古代文化を

も考究してゐる。

●熊野民俗記

松本芳夫著 三教書院

—民俗篇と民謡篇とに分たれ、

我が國史に於ても特異の地とみ

られてゐる熊野を研究したもの

—國史と民俗學(民俗選書)

柳田國男著 六人社

—史學と民俗學との關係を論じ

日本民族學の立場と方法を述

ぶ。民俗學が常に史學の手を下

し得ない文獻以外の「域を管轄して常民の過去生活を明かにすることを多くの實例を以て説き所謂郷土研究に對する信念を述べ歴史教育への指針を與へてゐる。

●太平洋の海洋と陸水

太平洋協會學術委員會編
岩波書店

—太平洋の海洋學的研究は英米により先鞭をつけられてゐるがわが學會も我が國を主體として獨自の太平洋學を樹立しつゝある。

●入蜀記

陸務觀、他著 米内山庸夫譯
大阪屋號書店

—「入蜀記」「吳船錄」「棧雲峽雨日記」の三冊からなり共に四川を叙した名著として古來有名なるもの。尙譯者は自身の實地調査並に諸文獻を參照して註釋を加へた。

●南太平洋の民族と文化

ジイ・ブーシヤン著 小堀甚三譯 聖紀書房

—歴史的構成及民族文化の本質、性格につき組織的に記載せるものにして概論書及入三書として殆んど唯一のものならん。

●氷河の山旅

田中 薫著 朋文堂
—水河地形をめぐる日本及歐米

の山の紀行と隨筆と寫眞とを納む。

●支那民族の形成

李清著 須山卓譯 生活社
—支那民族形成の過程を社會人類學的立場を論究せるもの

●農村の年中行事

武田久吉著 龍尾閣
—關東、中部、東北地方に行はるゝ年中行事を、十數年間に亘る探訪を中心として記述、多數の寫眞と圖畫により解説を補ひ且古今の獻文を引用して變遷の跡を尋ね、各行事の意義を闡明せんとしたるもの。

●日本列島篇(自然科學觀察と研究叢書)

山雅房
—地學、動植物、海洋、民族、建築等の各項目に就て各専門家分擔執筆、内日本の山岳は高須茂氏執筆

●標準天文學

山本一清著 恒星社
—専門學校程度を目標とせるもの

●輝く森林

河野勝彦著 第一出版協會
—青少年に森林に關する知識を與へ愛林、愛國の思想を涵養せんとするもの、解説寫眞五〇餘

●圖書紹介をいぢする事は困難なので取敢へず新刊書を新刊弘

報から抜いて紹介すれば多少役に立つかと思ひ掲載して見ました。

弘報を見て直ぐ書店に注文をして注文の多い本や發行部數の少ないものは買へないことが屢々ありますから、その方には役に立ちませんが。

右の表は急に書き抜いたので必要なもの落ちてゐるかもしれせん。今後、これを續けやうと思ひます。

猶簡単な内容の説明を附けましたが、それも弘報の説明から書抜いたものです。(編輯係)

集會記事

○小集會

昭和十八年十月二十七日 午後六時半
於 日本商工俱樂部

演題 ニューギニア旅行談

講演者 本會々員 石橋正夫氏

石橋氏は文部省資源科學研究所員として今春ニューギニア學術探

檢隊に参加、近頃歸朝されたので

その旅行談を會員のため御願ひし

た處御多用中にも拘らず一夕を御

さき下さつた。去年六月の小集會

に於てわれは猪熊泰三氏より

同じくニューギニアの御話をきい

た。同氏は植物資源の研究に當ら

れたが石橋氏は地質、土質方面

研究のために赴かれたのであつた。場所は同島の北岸、島頭の形の所であつたが、同氏も北大山岳部の先輩であり、當會員のために専門の方面よりも、特に探檢方面の話を撰び、探檢隊の組織方法、携帯の用具、先方に於て案内、擔荷役として雇用するバプア民族等の扱方などについて興味ある講演をされた。

この巨大な島は未だ大部分が調査が行き届かず又開拓もされてゐない。現在並に將來に於て我國のなすべき事業は多い。而してこの島の他の部分に於ては目下皇軍と米英軍との間に激烈な戦闘は行はれてゐる。講演をきいてゐる間にもこのことが頭を往來したのであつた。

常夜は、現在夜用にくい所多くの會員が集まり、いつもの如く、假令短い時間にして、講演の前後に挨拶を交す機会が與へられて愉快であつた。(田邊主計)

出席者氏名

石橋正夫、飛川維之、早川義郎

中村直男、横田敬一、目黒四郎、井

塚本繁松、内山均、福井宣久、井

上皓司、谷本弘、岩永信雄、立大

山岳部田丸、青木正雄、外山彌、

淺原重繼、中原孫吉、初見一雄、

山口京一、山崎和一、加藤泰安、

金山淳二、飯田輝英、兼松學、飯

山岳關係出陣

學徒壯行會

昭和十八年十一月十七日
午後六時半 於産組中央會館

右壯行會は左の順序によつて行

はれた。司會者塚本繁松氏。開會

の辭を兼松學氏述べたる後、横副

會長は會長に代つて壯行の辭を述

べ、これに對し出陣學徒代表早稻

田大學々生近藤等氏の挨拶があり

英米諸之吉氏發聲にて萬歳奉唱次

に出陣學徒萬歳を三唱、閉會の辭

兼松學氏を以つて閉會。小憩の後

別室講堂に於て獨逸大使館提供の

映畫三種、國際觀光協會提供のも

の二種を上映した。

この催しは兼松、機内兩氏の盡

力によつて諸般の準備が整ひ、役

員會にて決定後、京濱在住會員に

案内狀が發せられたのであつたが

の學生が出席され又會員も多く列席してこれを迎へた。晩秋といふよりも初冬、寒空に星は輝き風の冷へた晴れた夜、ちやうどブーゲンビル島沖の航空戦の輝しい戦果が報ぜられてゐた。送別會は誠に静かに美しいものであつた。それは山に登る人たちの間に見られるたしなみと静けさとの平易があつたが又威武高な言行は見られなくともこれらの人々のうちには何かしら難澁に屈しない強さとあからさまでない熱情とが感じられる。これらには横氏の言葉の力も多分にあつたことであらう。こゝに同氏のお許しを得てその全文を掲げた。これに對し近藤氏はまづこの催しについて禮を述べられ、ついで次のやうな意味の挨拶をされた。「われ／＼は既に今日あるを期してゐた。今まで山に於て學び鍊へた身體と精神とを以つて如何なる苦闘にもうち克つ決心である。もとより生還を期してはゐない。しかし、われ／＼のうち幾人かは還つて來るかもしれない。われ／＼の登山技術の習得は、世界の最も高く険しい峯々をもつヒマラヤを目標してやつてゐた。それらの人々は今よりは更に強い身體と精神とを以つてそれらの峯々に登るだらう。皆さんもその時のためヒマラヤの研究とその準備とを忘れな

いでゐて頂きたい」

近藤氏の言葉にも横氏の言葉にも強く心を打たれるものがあつた。そして私は獨り思つたのであつた——學生諸君も戰闘の小龍に、ふと此の出陣前の静かな一夕を思ひ出さるゝ事があるのではないかと。この夜の來會者は主客を合せ約三百名であつた。(田邊主計)

壯行の辭

横 有 恒

此度青年學徒諸君が出陣せらるゝに際しまして日頃山岳に關係の深い皆様方に對し本會は細やかながら門出を慶祝致したく御招き申し上げましたところ公私共に御多用中にも拘らず御揃ひにて御臨席を得ましたことは洵に光榮に存ずる次第であります。

會長が親しく壯行の辭を申述べます管でありましたが折悪しく少しく健康を害し引籠つてをりますので代つて私より御挨拶を致します。

惟ひまするに大東亞戰爭宣戰の詔を下したまひましてより早や二年に垂々としております。此間忠誠勇武なる皇軍は陸に海に空に赫々たる戦果を收められ又一方大東亞建設の偉業も着々とその歩を進められつゝあります。之れ偏へに

大御稜威の然らしむるところと恐懼感激に堪へませぬ。

然るに物量と生産との強大に驕る敵の抵抗は益々執拗でありまして戦は日々に熾烈の度を加へてをります。此の秋、學徒諸君が決然起つて銃をとられ國難に向はるゝ胸中定めし悲壯なるものあらんかと御察し申し上げます。否、悲壯と申しましては未だ思ひ到らざる恨があるかと存じます。寧ろ、死生を超越なさつた淡々たる御心境かとも御察し申し上げ誠に感謝と感激とに堪へないものがあります。

この光輝ある皇國を無限の未來に迄搖ぎなく榮えあらしめんとする皇國の此の門出こそは正に男兒の本懐之に過ぐるものなからんと慶祝申し上げるものであります。また思ひまするに私等山に親しむ者は麗しき皇土の恩愛を最も深く享けてをるものと存じます。今日こそは此の山を通して享けました平生の歎へを精魂を竭しても捧ぐべき秋なのであります。

堅忍持久よく精進し、よく艱難と戦ひ之に打ち克つて高きに到る雄健々闘の氣魄は登山には缺くことの出来ない精神であります。また周到なる考慮の下に準備行動し共同の目的のためには私を棄て一心協力して顧みないといふやうなことは登山には當然のことと

ありますが、此の登山に於かれての心構や成果は必ずや武人としての道とも直ちに相通ふもの多なきべきを堅く信ずるものであります。

何うか此の上は御承知の如く道元禪師の言葉にもありますやうに不惜身命、但惜身命——即ち御國に捧げるべき大切な命なれば苟もせずとの御心意氣を以て御出陣せられ御武運の愈々光榮あらんことを祈り上げるものであります。

御多用中折角の御光來を忝う致しましたがにも拘はりませず何の趣向もなく恐新に存じます。たゞ、茲に獨乙大使館並國際觀光協會の御好意により山岳映畫數巻を御覽に入れることが出来ることに相なつております。何卒ゆる／＼御觀賞下され御出陣の一夕を山の思出に御過し下されば幸に存じます。

次に在學々徒諸君に對し一言御挨拶させて戴きます。出陣の學友を送られ學窓に残るゝ諸君も定めし一片耿々の志安如たり得ないものがありなさうと存じます。

素より此の偉大な試鍊は鐵火の戦場のみならず私等日常の身邊にも迫つておるのであります。戰場と同様に之れに打克つて參らねばなりません。日常の凡ゆる方面に

迫つております此の試鍊に對し最も重要なことは、各々の立場に對し國家が何を最も要請しつゝあるかといふことを知り之を躊躇なく完遂するといふことではないかと存じます。或は學問研究に或は鍊成に或は生産方面等戦力増強のために皆様の努力を要請するゝところ甚大であらうと存じます。之等増強に對する仕事こそは學窓に残るゝ諸君のみならず私等統後の者にとつて専心すべきものであると存じます。

若しこの間に小閑を得て山に親しまれるときありとせば、その時こそ平素にも増して進んで山岳の精神に觸れ之を汲み浩然の氣を養ひ以て益々戰意の昂揚に資すべきものであると思ひます。

玲瓏崇高なる富士を仰ぎますとき誰れか國破れて山河ありといふが如き奴隸的境遇を甘受し得ませう。山岳の如き磐石不動必勝の信念を以て敢へて言擧げせず試鍊と戦ひ打克つて行くべきであると思ひます。

これを以て私の御挨拶を終ります。昭和十八年十一月十七日。

關西支部

山岳兵研究會

大東亞戰爭勃發後殊の外重視されるに至り尙多くの問題を殘して

あると見られる我國山岳兵に關し種々研究討議を爲すべく今回關西支部に於て左記七氏を主査に依頼し各課目に就き研究を進めて行く事にした。今後研究の進むに従ひ多少課目の變更増減はあるだらうが大體「露營具、工作具、炊事用具、登攀具、背負袋、雪中登攀具、運搬具、靴其他履物類、防寒具、被服附屬品、雪洞及立木利用の露營法」等を研究對象としてゐる。

既に四回の研究會を開き漸々成果を得つゝあるが何れ全課目の研究終了後何等かの方法にて發表したいと考へてゐる。會員諸兄の御高見は出来るだけ拜聞したく支部氣付「山岳兵研究會」へ御通報願ひたい。(富田)

主査氏名次の通り(順不同)
新村正一、山口季次郎、西岡一雄
跡部昌三、諏訪多榮藏、前田光雄
島田眞之介

會 告

定款ノ一部ヲ左ノ通り改訂ス

第六條、第一、二項

一、通常會員ハ本會ノ趣旨ニ賛シ會費年額拾圓ヲ納ムル者トス

二、終身會員ハ前號ニ準ジ一時金貳百圓以上ヲ納メタル者又ハ入會後滿十年以上ヲ經過シタル通常會員ニシテ一時金百五十圓以上ヲ納メタル者トス

右ハ昭和十八年度通常總會決議ニヨリ昭和十八年度ヨリ實施ス(昭和十八年十月認可)

會費納付ニ關スル規定

第一條 通常會費(年額拾圓)ハ毎年四月末日マデニ納付スベキモノトス

但シ半額ヅ、年二回ニ分納スルコトヲ妨ゲズ

右ノ場合ハ前期ハ四月末日マデ後期ハ十月末日マデニ納付スベキモノトス

會務報告

常務役員會報告

十月二十七日 於事務所

出席者 横、木村、沼井、中司、織内、小原、金山、杉本、谷口、早川、兼松、塚本
委任 木暮外十名
議長 横理事

一、會費變更許可ノ件

右ハ十月十二日付ニテ決裁トナリタル旨厚生省係員ヨリ通知アリタリ(塚本幹事報告)

一、登山探檢ニ關スル食糧研究ニ關スル件

右ハ次回沼井評議員ヨリ具體案案提出ノコト

一、出陣學徒壯行會ニ關スル件

横議長ヨリ提案實行スルコト、ス附記(十月二十五日夜兼松、小原織内、金山、谷口、杉本、塚本、事務所ニ會合、具體策協議ノ結果十一月十七日夜産組中央會館ニテ行フコトニ決定)

一、編輯出版報告 塚本主事ヨリ種々報告

一、振替貯金規則改正ニ關スル件 善處ノコト

一、入會申込者 三名承認
一、次回役員會日 十一月十日

役員會報告

十一月十日夜於事務所

出席者 横、田邊、兼松、織内、塚本
出席者少數ノタメ十七日ノ學徒壯行會實施ノ件ヲ議シ散會セリ

會員章再貸與

二二七七番 島田眞之助

舊番號二一四九番ヲ無効トス

圖書基金受領

二口金拾圓也 鳥山悌成氏

受贈圖書

勝田 市著

朋 文 堂

積雪期登山

川崎隆章編

山と溪谷社

川崎隆章編

山と溪谷社

登山講座第六卷

山と溪谷社

右二冊發行所

杉原邦太郎著

詩集 木々の梢に

右著者

リヒトホーヘン著

支那 V

右田邊主計氏

近藤 等譯

ヒマラヤへの挑戦

右譯者

岩波書店

川崎隆章編著

A5版 四五〇頁の大巻
定價五圓五十錢 送料二十錢
裝幀 上田徹雄

日本名山紀行

待望久しき本書「日本名山紀行」は全岳界括目裡に十二月中旬愈々上梓せらる。御注文は書店又は直接本社宛のこと。初版僅か二千部なり。

本書は祖國の名山三十座に就き各權威者がこれを分擔し、山の歴史、位置、紀行、時間記録、参照地圖、最新の注意事項等を明細に合筆した力作にして、當に岳界劃期的壯觀である。各篇概念圖、挿圖多數挿入。

タツツ (油彩畫口繪) 中村清太郎 名山の意義 (序文)

川崎 隆章

組寫眞 岡田紅陽、今泉正路、矢野忠三郎、阿部康三、石

川治郎、他執筆家の傑作寫眞總數二十點入り

大雪山 犬飼 哲夫

八甲田山 三浦 敬三

岩手山 達増寛一郎

藏王山 安齋 徹

平が嶽 中村 謙

苗場山 木暮理太郎

立馬山 冠松次郎

富士山 田邊和雄

白馬山 川崎隆章

加賀山 内藤八郎

大江山 三田尾松太郎

霧島山 藤木九三

朝鮮金剛山 仲西政一郎

東京・神田・小川町三ノ十

電話(神田)三四一五番

會員消息

松方三郎氏 大東亞新聞會議の爲十一月中旬上京下旬迄滞在

西堀榮三郎氏 チゴスにて傳染

病研究所に入院治療中經過良好

織田明氏 今春召集解除となり

歸還中今同再度應召

岡彦一氏 臺中高師農林校教授に轉任

今井田研二郎氏 (運輸通信省書記官) 鈴木行政公使 (石炭) 隨員として十二月中旬九州方面に出張

體育評論社

登山家のための山岳書庫

(小店の特約販賣)

日本山岳會刊行書

山と溪谷社刊行書

朋文堂山岳専門書

愛岳家憧憬書多種

參謀本部發行地圖

東京唯一の山書専門店
全日本各登山團體御用

山の家書店

日本山岳會會員 安藤 武

(所) 東京都本所區鹿橋三丁目二十七番地
(都電吾妻橋一丁目ト車南へ一丁)
振替口座東京一〇三〇六〇番



編輯後記

本誌最終月號を御送りするに當り會報への絶えざる御厚志と御援助に對し御禮申上げます。殊に遠い戦線より頂く御通信をいつも有難く存じております。また、はげみになつております。第一二六號に原稿のこと御依頼申上げましたが何卒宜敷御願ひ申します。本誌は八頁になるかと思ひましたが矢

張り十二頁に執着を持ち私の雜文など掲げ拙劣な編輯になり恐縮致しております。
大いに冷寒加はり全然暖味のな
い石造の大きな建物でお仕事の方
々は相當お感じになることとせう。
御からだ御大切になさいます。尤
習慣は確かに良いと思ひます。尤
も今は他の條件が加はりますから
人によつてはどうか解りませんが。

(田邊主計)

昭和十八年十一月十三日印刷
昭和十八年十一月十五日發行
日本山岳會内 編輯者 田邊 主計
發行所 塚本 繁松
東京都芝區神田區(不二屋ビル)
發行所 法人 日本山岳會
電話(芝)一六四九
振替(東京)四八二九九
東京都神田區佐久間町三ノ三七
印刷所 株式會社 文唱堂印刷所
電話(下谷)六七九五
東京都神田區深路町
配給元 日本出版配給株式會社

山と溪谷

第33號出來、創刊以來十五年の歴史を有する本誌は決戦下唯一の山岳雜誌として倍々重きを加へ、更に今回用紙増量の特典に浴した爲、從來入手難の讀者はこの際書店豫約、又は直接本社御注文願へば御入手出來ます。83號要目一極地探險家列傳、近畿の山、アラスカの山、岳人辭典、マダガスカル紀行、山の春、新春のスキー地、乗鞍紀行、萬座と横手山、積雪期の奥秩父縱走、戦技スキー、決死兵とスキー、冬の八幡平、清水生活、スキー用靴靴、越後の杵音、北關東の冬を歩く、その他滿載(1部.7)送.08 年極6部4.20送共)

槍ヶ岳へ

塚本繁松著、日本山岳寫眞書第五篇、原色版口繪入り、大好評發賣中(實價250送.03)

岳(たけ)

川崎隆章編、名家山岳隨筆集、百名家合筆の詩、歌、句、繪、文に由る山の再現、原色版口繪入り、大好評發賣中(實價380送.15)

丹澤山塊

塚本繁松著、日本山岳寫眞書第六篇、原色版口繪入り、十二月下旬發賣(實價250送.08)

登拜頌

藤木九三著、石井鶴三裝幀、決戦下岳人の戦意を昂める書下し論説隨想九篇に新作詩四篇を加ふ。上質コットン紙使用、十二月中旬發賣(實價293送.15)

赤城の四季

猪谷六合雄著、A5判アート刷に上州の名山赤城の四季の名寫眞を展開した待望の豪華版にて、志賀直哉、里見淳、長與善郎、關口泰四權威の隨想を盛る。一月下旬刊行。(實價6.0)送.20)

上越國境

塚本繁松著、日本山岳寫眞書第七篇、原色版口繪入り、中村謙氏解説と文に依る上越國境全域の詳解書。二月下旬發賣(實價250送.08)

山岳渴仰

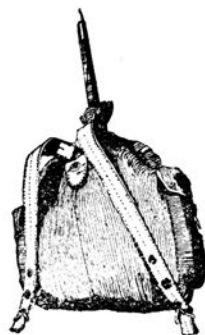
中村孝太郎著、原色版口繪二葉、序小島島水、木暮理太郎、跋田部重治、裝幀著者、山岳の神聖を繪と文に由り描く中村氏の處女作愈々成る。二月下旬刊行。(實價4.00送.15)

★本社出版物は書店申込み又は直接本社へ・山溪出版月報進呈★

東京都芝區 山と溪谷社 電話(芝)543番
田村町6-4 振替東京.60249番

キスリング型(E式)

ルツクザツク



御手元にある布地御持参になれば
御調製申上げます

山とスキー具専門

東都最古の専門店

東京都神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(3)三二一〇番
振替口座東京九一一八四番

店主 片桐盛之助